



緑肥・緑化の部屋 21

～環境保全の実践を目指して～

タキイ種苗(株) 営業部 緑化飼料課

Q

毎年、水田の裏作に「れんげ」をまいているのですが、春の開花も少なくうまく生育しません。何か原因があるのでしょうか？



↑アルファルファタコゾウムシの幼虫。



↑レンゲ茎内のアルファルファタコゾウムシの卵塊。(原図 池田二三高)

A

一般的に、「れんげ」の生育不良の原因は、圃場の排水不良が原因となっていることが多いようです。

「れんげ」は水田の裏作などで栽培されることが多いのですが、その割に耐湿性は強くありません。そのため、水田のような水はけの悪い場所で栽培する場合は、排水路を設けるなどの排水対策が必要です。それが無理なら耐湿性の高い「イタリアンライグラス」の栽培に切り替えることも有効です。

過湿以外に考えられる原因としては、『アルファルファタコゾウムシ』による食害です。この害虫はヨーロッパ原産で、マメ科植物を主に加害し、『日本の侵略的外来種ワースト100』にもあげられています。国内では、1982年に福岡県と沖縄県で初めて確認され、その後西日本を中心に、ほぼ全国に被害が拡大しています。

「れんげ」などを栽培し、はちみつを生産する養蜂農家の団体、(社)日本養蜂はちみつ協会では、『アルファルファタコゾウムシ防除対策マニュアル』を公表し、二つの対策を紹介しています。

一つ目の対策は、『ヨーロッパトビチビアメバチ』という天敵のハチを利用する方法です。二つ目の対策は、「れんげ」の播種の時期を遅らせることで被害を減少させる方法です。

ここでは、播種時期を遅らせて被害を減少させる方

法をご紹介します。アルファルファタコゾウムシは11～12月にかけて成虫が「れんげ」の圃場に侵入し、雌一匹で600～800個の卵を茎に産み付けます。その後2月ごろから孵化が多くなり、3月中旬ごろから幼虫による「れんげ」の葉や茎の食害が目立つようになります。そこで、「れんげ」の播種時期を10月下旬から11月上旬に遅らせることで、侵入する成虫の数を抑えるというものです。

これらの対策を実施して、来年の春は、畑を咲きほこる「れんげ」の花でいっぱいに見ませんか？

地力増進に、転作に、景観に！

れんげ

〈播種期〉

中間・暖地：

9月下旬～11月中旬

冷涼地：

8月下旬～9月中旬

(※北海道と東北の一部は栽培不可)

〈播種量〉

10a当たり3～4kg

